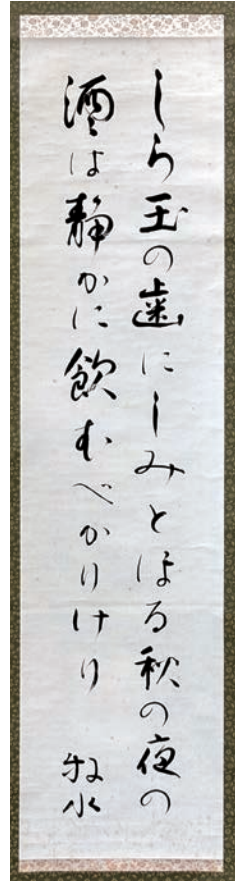


# 沼津市若山牧水記念館

第73号 令和6年9月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



しら玉の歯にしみとほる秋の夜の  
酒は静かに飲むべかりけり 牧水

第四歌集『路上』の「九月初めより十一月半ばまで信濃国浅間山の麓に遊べり、歌九十六首」の内の一。『路上』出版当初は結句が「飲むべかりけれ」となっていたが、その後、「飲むべかりけり」と改められた。

明治四十三年の牧水は、一月に第二歌集『独り歌へる』を名古屋の八少女会から出版。三月に『創作』を創刊し、四月には第三歌集『別離』を東雲堂から出版した。

『創作』『別離』出版の称賛の中で、私生活では、恋愛の破綻により心身ともに疲れはて、『創作』の編集さえ滞りがちになつてしまつた。ついに牧水は、『創作』の編集から手を引くことになり、後を友人の佐藤緑葉に託した。そして、九月二日に東京を発つて山梨県東八代郡境川村の飯田蛇笏を訪ね、十日ほど滞在した。その後の十三日、門下である岩崎樫郎に迎えられて岩崎の勤め先である小諸の田村病院の二階の一室に落ちついた。掲出の短歌は、小諸滞在中に作られた歌である。牧水は、小諸に滞在しながら、浅間山、菱野鉱泉、上田などに出かけた。小諸滞在中は、療養しつつ

二ヶ月ほど過ごした。

小諸滞在中に作つた短歌を四首紹介する。

城あとの落葉に似たる公園に入る旅  
人の夏帽子かな

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほ  
ろびしものはなつかしきかな

小諸なる医師の家の二階より見たる浅間の姿のさび  
しさ

かへり来て家の背戸口わが袖の落葉松の葉をはらふ  
ゆふぐれ

「しら玉の」の短歌について、牧水の高弟大悟法利雄は、『若山牧水の秀歌』で次のように解説している。

うらぶれはてた漂泊の旅の秋の一夜をひとり静かに酌む酒の味、それは歯にしみとおりはらわたにしみわたるような感じがして、疲れきつた体にも心にもようやくにして生気がよみがえり、瞳が輝いて来る。こんな静かな秋の夜の酒はなんといつてもこうしてひとり静かに飲むに限る、今夜はもう友だち連中も訪ねて来てくれない方がありがたいナ、という気持だが、この歌はなにもそうした旅さきの歌として味わねばならぬわけではなく、どこで作つた歌としてもすこしも差支えないし、酒を好む人なら誰しも経験があると思われ、また酒をたしなまぬ人でも十分共感出来る気持である。

表掲の半切は、本会会員であられた山本三朗様のご遺族から寄贈していただいた。

## 若山喜志子の老いの歌

阿木津 英

くさかえ  
日下江の 入江の蓮  
はなはちす  
花蓮 身の盛り人 羨しきろかも

古事記歌謡九五番の歌です。「日下江」は大阪の河内、日下江の入江にいったいに咲いている蓮、その蓮の花のように身盛りの若い男女たちよ、あなたたちが羨ましい、という歌です。岩波古典文学大系の註では「老いを嘆く老人の歌」とありますが、はたしてこの歌は老いを嘆いているのでしょうか。嘆きの気分が歌に流れているのでしょうか。

たしかに「身の盛り人 羨しきろかも」とは言っていますが、歌から聞こえてくる音楽は何と明るくて花やかなことでしょう。老人だって若返ってしまいそうなきうきした気分が感じられないでしょうか。

わたしは、成人を迎えた身盛りのいのちを老人たちが祝福する歌だと読みます。「羨しきろかも」には、自分にもかつてそんな日があつたと思ひ返しながら、若いいのちに対する明るい祝福の響きばかりが流れています。これが古代の老いの気分というものです。歌が

そう、わたしに語ってくれます。無常ということを知ったのちの老いの気分とも、産業廃棄物のようにさえ言われる現代の老いの気分とも、まったく異なります。

つまり、老いの概念——老いというものはどう考えるか——は、いつの時代も同じというわけではありません。

今、ここに若山喜志子の老いの歌を取り上げてみようと思いますが、喜志子は昭和二六（一九五二）年、六四歳のとき第六歌集『芽ぶき柳』を刊行しました。敗戦から六年後のことです。日本中がまだ貧しく、前年の朝鮮戦争勃発に関連してサンフランシスコ平和条約・日米安全保障条約が調印され、進駐軍が引き上げていった年です。この時代には、敗戦の衝撃を受けて戦地から戻ってきた男性たちの気分と、男女平等の理念にもとづく日本国憲法を得た女性たちの気分と、男性と女性との間には大きな気分の隔たりがありました。

男の老いの身につくかがやきは及ばざれどもわれは羨しも

『芽ぶき柳』



『芽ぶき柳』

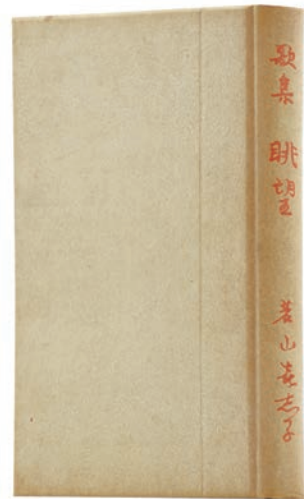
男は年をとるにつれて老いのかげやきともいえるものを身につける、女であるわたしは及ばないと思うがそれが羨ましい、わたしも身につけたい——という歌です。

戦前、女性は二流国民で、制度上、教育も何もかも男性の下になるように処遇されてきました。そんな女性の一人である自分も、しかし今、時代が変わった。還暦も過ぎた身だが、少しでも老いの理想の姿に近づきたい、老いのかげやきを身につけたいというのです。戦前の男女はライバルですらありませんでしたが、いまライバルとして意識することが許される時代に入った。新しい時代に生きる女性の意欲と希望が一首にみなぎっています。

老のわれ眼は生き生きと心音の躍りにたへて花にぞ見入る

『眺望』

第七歌集『眺望』は、昭和三六（一九六一）



『眺望』

年、七四歳のときに刊行しました。七〇歳前後の頃の歌でしょう。老人のわたしではあるが、眼はらんらんとして、心はわくわく、胸の弾みを抑えて花に見入っているという歌です。老いたって好奇心いっぱい、世界に驚く感性をこんなにも持っていますよ、ということです。なんとという若々しき。

同じ年頃のたとえば斎藤茂吉は、つぎのような歌を作っていました。

茫々としたるころろの中とほにみてゆくへも  
知らぬ遠とほのこがらし 『つきかげ』

茂吉は七〇歳で亡くなりますので、最晩年の歌ですが、そのころは、遠いところどころでこがらしが吹いているような茫々としたものでした。外界に対する関心がいつさい無くなっ

てしまったような境地です。すばらしい歌ではありますが、なんと、喜志子の歌と違うことでしょうか。

おとなしく老をうべなひ仄々と在り経む  
我を子は希ふらし 『眺望』以後

「もう少し年寄りらしくしていいよ、お婆ちゃん」という子の声が聞こえてきそうな歌です。ちっとも「老をうべな」わずに、何にでも関心をもち、毎日のように外を出歩く喜志子なんでしょう。

君よ君は自己を殺して生きむと云ふか我  
は活かし活かし生きて生き果てなむよ  
『眺望』以後

喜志子と同年代の女性たちは、「自己を殺して」生きることが求められていました。それが習性になって、何事にも引け目を感じ、出しゃばらないように気をつけて生きる、そんな心癖のついている人が多い。喜志子は、そんな社会の押しつけてくる女の生き方に若い頃には葛藤のあった人でした。しかし、今新しい時代がきたのです。ともすれば自分を殺す心癖を捨てて今こそ「活かし活かし生きて生き果てなむよ」と、大破調で、自らを叱咤するかのようにに宣言します。

〈脳軟化のさきぶれならむか思考力頓に衰へ眼さへかすむを〉という歌もありますから、身体の衰えはそれなりにあつたものと思いますが、気力がすごい。

身体弱れど病むにもあらずへなへなと  
て人に遇へば声元気なり 『眺望』以後

「身体弱れど病むにもあらず」、これが老いというものなのでしょう。以前に比べればへなへなしていることが多いが、いざ、人に遇うときには、しゃきつとして声が元気になる。

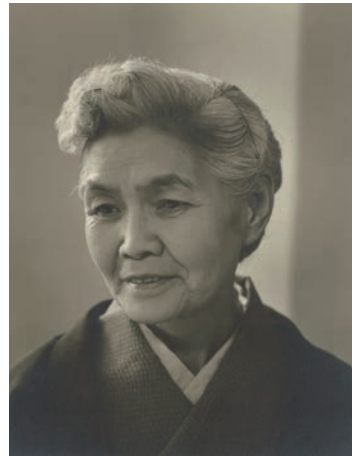
老いていよいよかがやきまさるこの友と  
対ひゐて語るたかぶりごころ  
『眺望』以後

「友」は、きつと女友だちではないでしょうか。この友も老いれば老いるほど輝いて素敵になった、若い頃よりずっと深みのある人に



喜志子の死後「短歌と生活の会」から発行された『眺望』以後





若山喜志子 (昭和27年9月28日)

なつた、対面して語り合っているとつくづく  
とそう思う。そんな女友だちといっしょにい  
ると、おのずと心がたかぶってくる。元氣に  
なってくる。わたしも負けてはいられない。  
「老いていよいよかかやきまさる」老いであり  
たい、と願うのです。

眉逆だち三角まなこ窪みたるこの面つく  
るに八十年かかりし 『眺望』以後

喜志子は、昭和四三(一九六八)年、八〇  
歳で没していますから、最晩年の歌でしょう。  
眉が逆だつて、眼が三角に窪んで、皺だら  
けのお婆さんの顔でしょうが、喜志子は、こ  
の老いの顔にひそかに誇りを持っていたこと  
がわかります。若い時は顔立ちの良さがこま  
かしても、年取ったら顔に来歴があらわれま  
す。喜志子は、八〇年間の自分の顔のなかで、

もつとも背うことのできる「この面」だつた  
のでしょう。この顔になるのに、八〇年もか  
かったのか。何とのろいことよ。そういうひ  
そかな吐息も聞こえてきそうです。

むかし、わたしがまだ四〇歳になるかなら  
ない頃、この記念館を訪れたことがあります  
た。そのとき展示されていた写真で、白髪  
の喜志子の顔に驚いたことがあります。何とい  
う素晴らしい年齢を重ねた方だろうと思いま  
した。

そこには、娘さんの言葉も添えられていて、  
お母さんは早く牧水に死に別れたことがよ  
かったと書かれてあつたことを記憶します。  
牧水没後の、喜志子の苦勞は並大抵ではな  
かつたはずですが、誰にも頼らず自分の足で  
立っていくという覚悟が、喜志子の老いの  
日々を鍛えたのでしょう。

老いは、逆らつても自然にやってくるもの  
ですが、しかし、それをどう受けとめるか。  
どう考えてゆくか。はじめに老醜や身の衰え  
を嘆くばかりが老いの歌ではありません。自  
分はどんな老いの時間を作りたいのか。

そう振り返るとき、わたしはあの古代の老  
いの明るさや、また老いの理想をもとめてや  
まなかつた喜志子の生き生きとした姿を学び  
たいと思うのです。

「筆者プロフィール」 あきつ えい



昭和二五年、  
福岡県行橋市  
生れ。熊本市  
在住。県職員、  
塾経営などの  
職歴を重ねな  
がら、作歌活  
動を続ける。  
現在、「八雁」  
編集発行人。

昭和五四年、「紫木蓮まで」三〇首で第二二回短  
歌研究新人賞を受賞。第一歌集「紫木蓮まで」風舌  
で、第七回現代歌人集會賞、第二歌集「天の鴉片」  
で第二八回現代歌人協會賞をそれぞれ受賞。平成  
一五年、「巖のちから」三〇首で第三九回短歌研究  
賞を受賞。その他の歌集に『白微光』『神聖娼婦』  
『宇宙舞踏』『青葉森』『黄鳥一九九二〜二〇一四』。  
歌書に『イシユタルの林檎』歌から突き動かすフェ  
ミニズム』『短歌講座キヤラバン』『アララギの釋  
道空』『女のかたち』歌のかたち』などがある。  
令和六年三月三日に開催した第三六回「雛の歌会」  
に、講師としてお越しいただいた。